

<書評> 米家志乃布著 『近世蝦夷地の地域情報：日本北方地図史再考』

佐々木, 利和 / SASAKI, Toshikazu

(出版者 / Publisher)

法政大学国際日本学研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

INTERNATIONAL JAPANESE STUDIES / 国際日本学

(巻 / Volume)

20

(開始ページ / Start Page)

233

(終了ページ / End Page)

238

(発行年 / Year)

2023-02-10

<書評>

米家志乃布著『近世蝦夷地の地域情報
—日本北方地図史再考—』
2021年5月 法政大学出版社

佐々木 利和

1

本書は副題に「日本北方地図史再考」とあるように、これまでの蝦夷地の地図作成史とは異なった視点から蝦夷地の地図をみ、そこに描かれた「情報を」読みとろうとする。その対象としたのが大縮尺の「地図というよりは、絵図・風景画」の存在である。これらによって幕府による地域情報の把握や蝦夷地経営の関係を考えるために「地図と同様に検討していく」と述べ、それが「日本北方地図史再考」につながる。そして19世紀半ばの幕府の蝦夷地直轄期は「蝦夷地の植民地化を進めるための前段階」であるとして蝦夷地の「内国植民地論」に論を進めていく。そして「本書のテーマは単なる一地方史や一地域史を明らかにする作業ではなく「日本」という歴史空間を問い直す作業になるという確信」のもとにまとめられたのであると。

さらに「はじめに」で著者は「歴史的に見れば、北海道は単なる日本の一地域ではなく、それ自体特殊な地域である。それは現在の北海道の人びとが、北海道以外の本州方面を内地とよぶことから想像できる」と述べている。そしてそれは「私たちが北海道と呼んでいる地域が、異域としての蝦夷地であった」ため、それが「いつ、いかにして日本に組み込まれてきたのか」が本書の「問題意識」として「大きく関わっている」と提起する。そして「日本国内において、あらためて国家と民族の関係を再考する時期がきている」との言は重い。

2

本書は第一部 日本の歴史空間と「蝦夷地」、第二部 「蝦夷地／北海道」における地域情報の収集と表象の二部からなり、「はじめに」で「一地図史と蝦夷地」「二内国植民地論と北海道」「三歴史地理学と日本北方の地図作製」をあげ本書編纂の目的を述べている。そして「おわりに—日本北方地図史を再考する」で本書は構成される。

著者によると第一部は「対象のスケールをヨーロッパやロシアから見た蝦夷地、日本全体のなかでの蝦夷地などのマクロスケールで」考察し、その章立ては

「第一章 ヨーロッパおよびロシアの地図にみる蝦夷地像」

「第二章 日本図からみる蝦夷地像の変遷」

「第三章 日本図・蝦夷図にみる庶民の蝦夷地像」である。

この第一章、第二章は外国や日本で作製された地図の中で、蝦夷地がどのように描かれているかを通史的に検討したものであり、第三章は「庶民の地理的認識としての蝦夷地像」を明らかにするためとして「一枚物の刊行地図」と「節用集付録の地図」を史料として用いるという。これらは本書全体の序論であり、取り立てて述べることもない。ただ第三章では『節用集』所載の地図に注目しているが「旧態以前とした蝦夷地像が民間に長らく流布した」のだという指摘は興味深い。

つぎに第二部は「スケールを絞り、蝦夷地の地域図の注目」するといひ、その章立ては

「第四章 日本における蝦夷図作製と地域情報」

「第五章 松前藩・江差沖の口役所収集の絵図に見る地域情報の把握」

「第六章 東北諸藩の蝦夷地沿岸警備と地域情報の収集」

「第七章 松浦武四郎による地域情報の収集とアイヌ民族」

「第八章 目賀田帯刀の風景画にみる蝦夷地／北海道像」

「第九章 植民都市・札幌の風景と植民地としての北海道像」

となっている。このうち新稿は第四章と第八章である。

第四章は蝦夷地の作製史として先学三人の研究にふれ、さらには蝦夷地の沿岸図を取り上げ、地域情報の収集の在り方を検討するとして第五章以下を概説している。それによると

第五章は「松前藩領であった江差沖の口役所における情報収集」、第六章は「東北諸藩（秋田藩と盛岡藩を事例とする）西蝦夷地・東蝦夷地の情報収集」、第七章は「江戸幕府から蝦夷地調査に派遣された松浦武四郎」、第八章は「目賀田帯刀」らの蝦夷地情報収集の有り方と表象の検討、とりわけ蝦夷地／北海道像に関する画像の比較などをおこなう。そして第九章は「開拓使による風景画を通した札幌の表象分析」をする。

3

本書はすでにいくつもの書評や紹介記事がでていると仄聞している。それだけ注目されている著作であるということだろう。ここでは上述した本書の内容全体の紹介するというよりはアイヌに関する情報を中心に読んでみることにしたい。

はじめに第五章、第六章について見てみたい。第五章は江差沖の口役所旧蔵の地図二十五舗にもとづき西蝦夷地（蝦夷地の日本海、オホーツク海沿い）岩内（イワナイ）からレフンシリ（礼文島）までの読みとった地図情報を表に示している。そして松浦武四郎の『西蝦夷日誌』による同地域の情報も比較のため表示する。これらの地図はいずれも海岸からみた鳥観図で景観が、そして運上屋とその周辺が描かれる。著者はそれを図版で示しながら情報を収集しているのであるが、絵図には運上屋とその関連施設の位置などのほかコタンの位置が示される。このコタンは運上屋元コタンといい、本来は古くからあったコタンに運上屋をもってきたものと、運上屋の場所に強制的につくられたコタンとがある。コタンには「土人小家」（チセのこと）などと記されており、複数ある場所もある。なお筆者はこれらの図のうちチセに関してその素材を指摘しているが、これらの図からはそこまで読みとることはできない。

一は運上屋元コタンで他は強制コタンの可能性が考えられる。

第七章「松浦武四郎による地域情報の収集とアイヌ民族」を読んでみよう。

著者はここで武四郎の著した版本類の中から『天塩日誌』に着目して「彼の作製した天塩川流域の地域情報」のなかに「どのようにアイヌの人びとの空間的情報が隠されているのか」を具体的に明らかにしていくとする。そしてそれをもとに「松浦武四郎の地誌・地図作製とアイヌの人びととの関係を考察すること」が目的であると述べる。

ところで武四郎は天塩川は石狩川につぐ蝦夷地第二の大河であるといい、山中にコタンがあり、三百人に近い人が住んでいたがその三分の一が運上屋元にいっているという。なぜこの川の流域を対象としたかについて著者は「和人の進出が進行していた幕末の西蝦夷地のなかでは、比較的、アイヌの人びとの生活や文化が維持され」ており、それは石狩川流域とは違い「武四郎がこの地域のイメージを構築するに際してアイヌの人びとから多くの情報を得たことが推察できるから」なのであると。そしてそのためには地図の「図像の特徴」を考察するために「図像の比較を行う」のであると。

かかる意図を意識しながら読んでいくと著者の大きなミスに気づく。もう著者も周知のことであろうしほかの書評子からも指摘されているであろうから、ここで指摘するまでもないのであるが、一応。それは本章の核である『天塩日誌』に所収されている天塩川の図（図47）は実は十勝川の下流域の図なのである（『十勝日誌』所収）。この誤りは大きい。蝦夷地を知らない読者はなにも理解できないであろう。そうした観点からすると、著者が取り上げた地名（表10、表11）は注記もなにもなく理解できない。例えば表11のカタカナ地名であるがそれには「必ず武四郎自身のコメントが記載」されていると。六月八日調査の「ウフシテ」のあとに「左川」とあることなどを指摘している。ほかにも「右川」などの記載もある。これに関しての注釈がないので理解しにくい。

武四郎は天塩川を河口から上流にむかって遡上した。奇しくもアイヌの人びとの意識によると川は河口から上流に向けてのぼっていくのである。その途次に出会った枝川が本流に向かって落ち合う口が左にあるものを「左川」などとし、その口の地名を案内のアイヌから聞き取ったのである。またかれの地図にはコタンの位置も記されているがその注記も本章にはない。著者も

指摘するように、武四郎にかぎらず蝦夷地に行くものは必ずアイヌの人びとの情報を必要とした。その意味ではアイヌがいなければ「これだけの詳細な記録を残すことができなかつた」という指摘はそのとおりでである。とはいうもののアイヌ情報に関する叙述には不満がある。

第八章は目賀田帯刀の二種の地図の比較であるが、これについては挿図に難があり、もすこしきれいな図を使ってほしかった（表紙のカヴァーのように）。

ところで内地という言葉が頻繁に使用される。なるほど、わたくしのように古く北海道に生まれ育つたものたちにとって、本州から先は「内地」であった。「内地に行く」「内地米を食べている」「内地のひと」などはごく当たり前に使っていた。では、そのとき住んでいる北海道は「外地」であったろうか。そうした意識はなく単に「北海道」であった。内地の語はしかし現在の若い人の中ではあまり使われていない。

内国植民地論に関わるのは大きな問題の提起でもある。日本史でいう近世という時期に「異域としての蝦夷地」にはアイヌの人びとが海に面した河口を中心にコタン（村落）を形成して居住していた。そしてイウォロ（コタンの住民の先住的な狩漁猟の場）を中心に生活の糧を得ていた。石高をもたない松前藩は藩士への知行としてこのコタンでの交易権を与え（商場知行制）、やがてその交易権を商人に請け負わせた（場所請負制）。

この場所にアイヌの人びとがさらに集められ、労働を含めたさまざまな搾取が行われた。そして幕末、明治以降に和人（シャモ）の出稼ぎや入植がさまざまなかたちでおこなわれた。内国植民地という発想である。著者はこの異域としての蝦夷地、そして内国植民地としての北海道とのかかわりを「蝦夷地／北海道」との文言で示している。ここで著者が用いたスラッシュ（／）の解釈は重要である。ただ入植者の子孫は五世代以上におよびアイヌの人びとも日本の先住民族である。内国植民地論（セトラークロニアリズム論や植民都市札幌を含めて）を「内地」からの目線で論ずるのは困難なものがあるう。

米家志乃布氏の著書『近世蝦夷地の地域情報』についてみてきた。地域というよりは場所の情報といったほうがいいかもしれない。西蝦夷地の場所絵図から読み取れる情報は、多く和人（シャモ）に関わるものであった、とっていい。

とはいえ、絵図による地域情報の収集をまとめたものとしては初めての業績であろう。蝦夷地に関する沿岸絵図はまだ多く存在するし、なによりも東蝦夷地（太平洋岸）についてはほとんどみていないとっていい。この地域に関しては多くの資料がある。早い機会に続編として出版を企画してほしいと願っている（あるいは進行しているのかもしれないが）。